

治療家は 日々勉強!

—治療院内スタッフ研修の場合 その2—

「治療家は日々勉強」といいますが、実際どのように勉強しているのでしょうか。今回は約20人のスタッフを抱える千里堂治療院（東京都）を訪ね、実際に研修会の様子を拝見してきました。

【千里堂治療院】（調布）
東京都調布市小島町1-34-4
調布銀座ゆうゆうロード内1F
電話：042-498-7798
<http://senrido.com>
(患者は予約制)
治療時間：月曜～金曜 9:00～21:00
(20時受付終了)
(スタッフは早番・遅番に分かれて勤務)
土曜・日曜・祝日 11:00～19:00
(18時受付終了)

スタッフ研修の概要

●主なテーマ、講師

テーマは多岐にわたる。スタッフが持ち回りで発表者（講師役）となる。

●参加人数

10人程度（2院から参加者が集まる。開催院でない院は通常通り開院している）

●開催回数／時間

定例研修会は年間10回。時間は平日昼の2時間。そのほか、臨床に出るまでは新人研修、臨床に出るようになってからも個別研修がある。

●開催歴

2006年までは半年～1年に1回のペースで行っていた。2007年以降現在のスタイルに定着。取材した日は37回目の定例研修会だった。

過去の研修会テーマなどは千里堂治療院のホームページから見ることができる。

【調布】<http://senrido.com>

【経堂】<http://senrido.jp>



テーマも発表方法も自主的に決める

千里堂治療院は東京都調布市と世田谷区経堂の2カ所に治療院を構えている。今回のスタッ



総院長の横顔

総院長の三浦真人氏は1963年、大阪府生まれ。10年間教職に就いたあと、鍼灸あん摩マッサージ指圧師を志す。ヘレンケラー学院卒。2002年、東京都調布市に千里堂治療院を開業。その後2006年に世田谷区経堂に女性患者専門院を開設。東京都はり灸マッサージ師会員。著書に「経絡リンパセラピー」（永岡書店）がある。



千里堂治療院（調布治療院）の外観

研修（定例研修会）は調布治療院で行われた。調布駅北口から徒歩2分。ホームページに詳しい案内図が掲載され、写真入りで道順を説明しているので迷うことなく着くことができた。

取材日時点では、千里堂治療院には調布治療院に9人、女性専門の経堂治療院に9人、事務職のスタッフと総院長を合わせると計20人が勤務している。

定例研修会は、スタッフが無理なく参加できる平日昼の時間帯を確保して開催される。この日も正午から2時間、行われた（スタッフの休憩時間は別に確保される）。患者には事前に理由を説明し、この前後3時間の予約を受け付けないようにしている。

定例研修会のテーマは毎回多岐にわたる。

「病気や症状を取り上げて研究して発表することもあれば、コミュニケーション法や問診方法などを議論することもあります。今回の『アトピー性皮膚炎の治療』のように、症例検討会として施術を一通り再現し参加者から感想や意見を聞くこともあれば、外部の勉強会で学んできたことを伝達する場として使うこともあります」と総院長の三浦氏。発表者は事前に三浦氏

や所属の院長とテーマについて相談し、全員に予告する。参加者に予習や宿題を課す場合もあるという。

また、定例研修会は年10回行われる。それとは別に、採用後の研修期間を終えて臨床に出るようになったスタッフには、3ヵ月研修・5ヵ月研修・7ヵ月研修・9ヵ月研修といった長期的な研修も義務づけている。



症例検討で率直な意見や 感想を言い合う

勤務スタッフがそれぞれ軽い食事を済ませ、休みのスタッフも時間に合わせて集まってきた。そして治療室のベッドを机代わりに取り囲んで座り、研修会が始まった。

この日は2つのテーマが用意されていた。最初は「アトピー性皮膚炎の治療」。調布治療院の大房純子さんが発表者をつとめ、アトピー性皮膚炎を改善するためにスタッフを患者役に、最近試みた治療について報告した。

大房さんはまず、なぜアトピー性皮膚炎をテーマに選んだのかを述べた。アレルギー性疾患に対し効果があるという治療穴や、免疫系を強めるための取穴、痒みを改善するための灸を試してみたかったという。

続いて、アトピー性皮膚炎の症状を解説。湿疹の現れ方や、子供と大人の違い、体質、合併症、一般的な治療方法のほか、皮膚科で処方される薬品についても資料を配布した。千里堂治療院は現代医学を重視する立場なので、病因や病態は現代医学の言葉で語ることを基本にしているそうだ。

「ここまで質問はありますか」と大房さんが参加者に尋ねると、患者についても様々な質問が飛ぶ。「病院へはどのくらい通っているの



アトピー性皮膚炎の資料を示しながら解説する大房純子さん（左手前から3人目）

ですか」「処方されている薬は？」などなど。

「お風呂から出る直前に熱めのシャワーを患部にかけて、お風呂から出たらすぐに保湿剤を塗る」など、参加者が見聞きしたアトピー改善方法もあれこれと話題にのぼる。

次に患者役のスタッフをベッドに寝かせ、大房さんが行った治療を再現した。丁寧に触診しながら刺鍼していく。患者の反応を確認しながら置鍼も行った。糸状灸は「モグサを捻る手元は見ないので置いていきます」と言いながら実技を示し、そのあと参加者全員で試してみた。患者役の両上肢を押挙して交代で糸状灸を施す。他のベッドでも2人1組になって互いに試し合い、「けっこう熱いね」「神経痛にも使えそう」など感想を話しながら、日々の臨床のヒントを共有していた。

この間、総院長の三浦氏はビデオ撮影に専念していた。これもスタッフの自主・自立（自律）を重んじる姿勢の現れだという。

「私は、皆が認識を共有し、千里堂の治療に生かせる知識や技術を学べるよう縁の下で支える立場です。話が脱線するようなことがあれば声を掛けますが、そういうことは滅多にありませんね。治療をめぐる問題は、正解がひとつとは限りませんから、大勢の知恵が結集されるこ



患者役のスタッフの両肘で糸状灸を試す。奥でも2人1組で試し合っている

とが大切です」

研修会は両院それぞれが企画して開催し、開催院は勤務している者の大部分が出席する。研修日が公休にあたるスタッフが参加した場合は有給とし、開催しない他院からも必ず1人以上を派遣することを義務づけており、交通費も支給される。研修会の様子は動画で記録し、参加できなかったスタッフも内容を確認することができるという。

最初のテーマが終わって5分間の休憩をはさみ、参加者は動きやすい服装に着替え、2つのテーマ「メディカルストレッ칭」の研修会が行われた。発表者の森山晃子さんは『メディカルストレッ칭』（金原出版）を資料に発表した。「肩こりや腰痛で悩んでいる患者さんはたくさんいらっしゃると思います。千里堂での治療のほかに自分でストレッチもできたらもっと効果を上げられるはず。患者さんに、自



肩のストレッチングのやりかたを説明する森山晃子さん（中央）

自分でやることで身体がもっと楽になりますよ、と教えてあげたい」と森山さん。メディカルストレッ칭について概要を述べたあと、実技へと移った。



丁寧な治療をするために

前述のように千里堂治療院には20人のスタッフが勤務している。研修会終了後、三浦氏に大勢の鍼灸師を雇用する理由を尋ねた。「単純に、大勢いたほうが楽しいから」と三浦氏は笑う。

「それは半分冗談としても、治療していくて迷ったことや困ったことを、身近な場で誰かに相談できる環境が大切だと考えています。もちろん、誰に聞いたところで正解があるわけではないでしょう。「自分だったらこうしてみるかな」「患者にこういう質問はしたの?」といった、「自分なら」というやりとりが大切なことです。それができる環境、つまり共に働く仲間が大勢いる職場を作ることを目指してきました」

所属院に関係なくスタッフ全員がメーリングリストでつながっており、事務連絡だけでなく、症例報告や治療の相談を出し合っている。例えば「こんな症状で悩んでいる患者がいる」という相談のメールが流れると、他のスタッフから

「自分も経験がある。その時はこうやってみたら良かった」といった返信がある。

「こういったやりとりが全員に見えるところでなされています。もちろん、目の前にいる同僚に口頭で相談することも日常的です。ひとりの経験や悩み、失敗を全員で共有することが大切なので、なんでもオープンにするようスタッフ皆が心掛けています」

悩みを共有し、技術を高め合う仲間が大勢いるのは理想的な職場かもしれない。しかし、大所帯になればなるほど盤石な経営が必須となる。千里堂治療院は自費治療のみだそうだが、果たして経営は順調なのか。單刀直入に聞いてみた。

「順風満帆とはいきませんが、大丈夫です。ここまで苦労も絶えませんでしたが、2つの自費鍼灸院というスケールメリットもあり、患者さんにも助けられて、順調といえるでしょう。研修についても経営についても、2つの院が相互に助け合う仕組みを築くことができました。スタッフの勤続年数が年々伸びていることが私の勝利です」

三浦氏の経営方針は「経営者・勤務鍼灸師・患者、この3者が皆、笑顔になれること」。患者も含めてこの方針を共有したいと考えている。例えば、売上を1円たりともごまかさない方針は患者にも話し、スタッフには「胸を張って、ただし感謝の気持ちだけは忘れずに治療代を受け取ろう」と伝えている。お金を預かるときは金額にかかわらず必ず領収証を発行、そのまま決算・税務申告する。「領収証を発行しなければ、患者は治療代を医療費控除にさえ利用できない。業界が発展するためには、当たり前のことを当たり前にやることこそが重要」とのこと。



千里堂治療院の第37回定例研修会に参加したスタッフ

また、取材の日、スタッフルームでは洗濯機と乾燥機がフル稼働していた。患者が着るパジャマや治療着は1回使用で洗濯、タオル類も頻繁に交換するためらしい。

「洗濯機も乾燥機も一日中稼働しています。故障して業者を呼ぶと『どうしてこんなに早く壊れるのか。耐久テストをしているようだ』と驚かれますが、仕方ありませんね。洗濯も掃除も一切手を抜かずにやるのが千里堂の方針です。患者から見えないとこだから汚れていてもいいなどということは絶対に、ない。裏表のある性格の人は治療家には向きです」と三浦氏。例えばトイレ掃除は1日2回行っているそうだ。

また、会話には「です」「ます」の丁寧語を使う。患者がいってもいなくても、スタッフ同士の場でも、経営者である三浦氏も含め全員が丁寧語で会話することを基本としている。「年齢

や経験に差があっても、患者から見れば同じ治療代を払う担当鍼灸師だから」だという。

経営もスタッフ研修も、「透明性」がポイントのようだ。



毎日が臨床、毎日が研修

助手ではなく臨床家として成長するには、毎日患者の体に自分で触れる必要がある。成長のためには、手を通じて患者の体と会話することが必須、と三浦氏。スタッフ研修は、その持論を実践するための環境整備のひとつといえる。「自主・自立(自律)」を基本理念とし、研修会も「院長先生が講師、スタッフは生徒」という一方通行のものではなく、スタッフ自身が講師となって持ち回りで担当しているのも特徴だろう。

充実した研修会を続いている千里堂治療院。「臨床と研修は車の両輪。どちらも重要で、なくてはならないものです」と三浦氏は語る。そ

して「研修会は特別な位置付けにない」とも強調する。

「『毎日が臨床』というのが基本スタンスですので、患者や治療について毎日気軽に話し合える雰囲気づくりこそが大事です。研修会という特別な場よりも、そういった日常こそ大切にしたいですね」

千里堂治療院のスタッフは三浦氏が求人面接で2~3時間かけて採用した精鋭たちだ。三浦氏は「応募していただいた方の中には、残念なことにタイミングが悪かったり、そのとき募集している勤務曜日・時間帯と条件が合わなかつた方もたくさんおられます。縁がなかっただけで一概に不採用とは考えていません。実際、初めての応募では縁がなかつたものの数年後に再応募してくれて、今では大活躍している者もお

ります」と前置きした上で、「当院に勤めている鍼灸師は、千里堂の治療、つまり自分で患者の全身を診る千里堂式治療で臨床経験を積みあげたくて集まつた人ばかり。皆がお互いを治療家として尊敬し合っている」と誇らしげに語る。

そんな精鋭たちがやりたい「千里堂の治療」とは何か。特徴を尋ねると、「『丁寧』の一言に尽きます」との答えが返ってきた。

「刺鍼や施灸の技術だけでなく、患者にどう触れるか、そして患者との会話や所作のひとつひとつ、すべてにおいて鍼灸師としての『たしなみ』を身につけた者だけが臨床に出ることを許可されます。最高の料理を提供できるだけではなく、人格的にも優れた『三つ星レストランのシェフ』のような鍼灸師になろう、と日頃から話し合っています」